

序『カラム』の時代XII

マレー・イスラム世界の社会変容と女性

光成 歩

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム』(Qalam)を主な資料とし、脱植民地化期のマレー・イスラム世界におけるイスラム教徒の関心や課題について考察するものである。

マレー・イスラム世界の人々にとって、1950年代から1960年代は、脱植民地化と国民国家の建設という政治的な課題に取り組んだ時代である。この時代には、独立を目指す複数の枠組みや思想潮流のなかから、現在の国民国家を形作るマレー・ナショナリズムが主流となっていった。マレー・イスラム世界の政治史の記述において中心となってきたのは、このマレー・ナショナリズムを軸とした国家形成の歴史である。

他方、マレー・イスラム世界の1950年代から1960年代にかけては、主流になり得なかった思想も含め、国づくりの構想や社会的課題が出版物を通じて活発に議論された言論の時代であった。イスラム教を基盤とした社会を作ろうと呼びかけた『カラム』(マレー語で「筆」)は、この時代の言論空間で読者を得て、20年という長期にわたり刊行を続けた雑誌である。

本論集は、『カラム』誌面の読み解きを通し、『カラム』が読まれた時代のイスラム教徒たちの生活世界に接近しようとするものである。多民族・多宗教・多言語からなるマレー・イスラム世界の混成的な社会構成と、近代化による急速な社会変容が、イスラム教徒の日常生活のなかで具体的にどのように立ち現れ、どのような課題として経験されたのか。『カラム』の時代を生きた人々の声に着目して、この問いに接近する。

1. 独立期社会の方向性を問うた雑誌『カラム』

『カラム』は、1950年7月から1969年10月にかけて発行されたジャウイ綴りのマレー語による月刊誌である。編集者のエドルス¹⁾は、カリマンタン出身

1) サイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus, 以下エドルス)。1911年にカリマンタンのバンジャルマシんで、アラブ人ムスリムの両親のもとに生まれ、1930年にシンガポールにわたって出版・執筆活動を始めた。エドルスの伝記に[Talib 2002]がある。

のアラブ人イスラム教徒で、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げ、小説などの商業出版をへて『カラム』の出版を始めた²⁾。『カラム』は、当時の定期刊行物の多くが短期間で停刊となるなか、20年間にわたって途切れることなく発行された異例の雑誌である。『カラム』の主な読者層はシンガポールを含むマラヤ在住者だった一方、タイ南部からボルネオ島を含むマレー・イスラム世界の周縁部にも読者がいたことがわかっている。

マレー語出版において、ローマ字綴りが主流となるなかでジャウイ綴りを採用し続けた点も、他の定期刊行物と一線を画す『カラム』の大きな特徴である。『カラム』の発行当時、学校教育などを通じてイスラム教徒だけでなく非イスラム教徒にもローマ字綴りによるマレー語が普及しつつあり、ローマ字綴りで出版することは、読者層を拡大する機会となりえた。『カラム』は、イスラム教育を通じてのみ身につくジャウイ綴りを採用し続けることで、イスラム教徒が抱える問題をイスラム教徒のみによって議論する場となることをあえて選んだ[山本 2002]。

『カラム』は、同時代の世界が急速に変化するなか、マレー・イスラム世界のイスラム教徒を「私たち」(kita)と呼んで、そういった変化にどう対応していくべきかを論じた。『カラム』創刊号では、次のように述べている。

今日、私たちが暮らすマレー世界は、社会環境、思想環境、政治環境のいずれにおいても大きな変化に直面している。それらの変化が私たちにとって有意義であった生活を向上させるものとなるためにも、私たちは適切な指導者や指針を必要としている

[Qalam 1950.7/8; 山本 2016]。

『カラム』の発行が始まったのは、東西対立が激化していた1950年である。『カラム』創刊号は、非イスラム圏の朝鮮半島の分断や戦闘について、歴史的経

2) この経緯に関しては、本論集所収の山本論文も参照されたい。

緯や戦闘の様子を地図や写真を用いて詳しく報じている。また、ベトナム戦争も報道写真をふんだんに盛り込んで取りあげられた[坪井 2014]。1951年4月号のイラストには、各国のイスラム教徒が、東西対立下で大国に虎視眈々と狙われている描写が表れており、『カラム』が冷戦下の対立に危機感を抱いていたことが窺われる³⁾。

1950年代から1960年代は、インドネシアとマラヤにおいて、それぞれのナショナリズム勢力の主導による国民国家の建設が進んだ時期でもあった。『カラム』は、シンガポールを含むマラヤを「祖国」(tanahair)と言及し、マレー・イスラム世界の植民地がそれぞれ国家を建設することを前提としつつ、新生国家はイスラムを基盤とすべきだと訴えた。そのなかで、マラヤよりも早期に独立を達成したインドネシアの選挙や政治動向を参照しようとして多くの論考が掲載された⁴⁾。

『カラム』の長期連載記事のタイトルを挙げてみると、「社説」、「千一問」、「祖国情勢」、「女性の園」、「苦いコーヒー」、「月々徒然なるままに」、「我々はどこへ向おうとしているのか」、「マレー語」、「宗教とは導きなり」、「コーランの秘密」、「コーランはイスラム文化の中心」、「イスラム国家」、「ムスリム同胞団」、「イスラム文化」、「言葉の広場」、「女性の世界」、「哲学と文化」、「イスラムの呼び声」、「芽を摘む」などがある。宗教、政治、女性、哲学、言語、文化といった幅広いテーマ設定には、脱植民地化と国民国家建設という政治過程と、社会の諸領域の変化とをつなぎ合わせてとらえ、独立によって社会が到達すべき方向性を判じようとする『カラム』の問題意識が示されている。連載の誌面では、実社会において連載のテーマに関連する出来事が起これば連載内容を繰り下げて時事問題への論評を行うこともめずらしくなく、実社会への関心に裏打ちされた執筆および編集方針を読み取ることができる。

3) [Qalam 1951.4; 山本 2016]参照。東西対立による政治的緊張だけでなく、大国間の競争からイスラム教徒が取り残される不安や、足元の社会に目を向けた際にマレー人若者の間に見られた信仰離れの現象も、『カラム』の通奏低音をなす危機意識だった[山本 2002]。

4) 例えば、1955年に行われたインドネシア総選挙に言及した記事の分析に[山本 2010b]がある。『カラム』執筆陣については[山本 2002]を参照。執筆陣もマラヤだけでなくインドネシアの改革派知識人を含み、誌面は国境を超えた知的交流を担った。インドネシアとマラヤの政治情勢や相互参照については[坪井・山本 2017; 坪井・山本 2018]の各論文を参照。

2. 『カラム』にみる女性と社会

『カラム』は、創刊号から女性をテーマとする連載を掲載し、かつその他の論説コーナーでもイスラム教徒女性の権利や家族規範に関わる論題をしばしば扱った⁵⁾。当時、イスラム教徒女性たちは、就学・就業・政治参加などにより活動領域を広げており、これに伴い、幼年期での結婚や安易な離婚など、家族形成に関する社会慣習にも批判が寄せられるようになっていた。議会では男女の賃金格差の是正や家族法改革が進められ、とくにイスラム教徒の結婚と離婚に関する話題が日刊紙でも大きく取り上げられた。結婚や離婚に関する論争は、女性の活動の場が広がり、公共空間での存在感が増すなかで、女性を社会にどう位置づけるかという問いが、社会全体にとっての課題となっていたことを表している。

教室に居らぶ女子児童や大学構内を闊歩する女子学生、政治集会で男性の面前を行進する女性たちなど、写真を多用した『カラム』誌面でも、社会における女性の存在感は反映された。

『カラム』において、イスラム教徒の結婚と離婚の問題は、社会のあり方に関わる関心事として扱われた。その関心は、伝統からの女性の解放、伝統を固守する宗教指導層への批判、社会制度としてイスラム教徒の婚姻規範を整えることによる宗教の社会における再定位、そして、近代化する社会のなかで信仰を育む単位としての家族の再定位など、複数の側面からなっていた。

こうした関心を背景として、『カラム』はイスラム教徒女性をめぐる論争、とりわけ結婚と離婚の問題に対して、誌面を割いて議論の場を提供し続けた。例えば、家族法改革に際しては、法案全文をマレー語訳(およびジャウィ翻字)して掲載し、イスラム教徒が法案の内容をふまえて改革の是非を吟味するよう促した。また、女性解放を訴える誌面がムフティによる異端宣告などの攻撃を受けた際には、その文面を全文掲載し、これにさらに反論することで応えた。

このように、『カラム』の誌面は、社会に対する問題意識に照らした独自のメッセージと、多様な媒体からの引用および転載とによって構成されており、読者は、『カラム』を通して多様な立場の意見が議論を

5) 創刊号からの連載「女性の園」では、エドルスが女性の筆名でイスラムの婚姻や家族制度における女性の権利を論じた[光成 2019]。

戦わせる言論空間に参加することができた。

20年間という『カラム』の発行期間は、社会の長期的な課題に、イスラム教に基づいて対処しようとしてきたイスラム教徒たちの動向の把握を可能にしてきた⁶⁾。本論集は、本年で12年目となる『カラム』共同研究のこれまでの成果をふまえ、『カラム』のメッセージを受け取り、変化する社会情勢のなかでの指針としようとしてきた『カラム』読者の世界をとらえる視座から『カラム』誌面の分析を行うものである。

読者の世界は生活の世界である。『カラム』で論じられてきた、宗教、政治、思想、教育、市場、女性、家族といったテーマ群が、生活世界のなかの論題として経験され論じられた過程を、本論集を通して明らかにする。また、このなかで、多宗教・多民族・多言語からなる混成的な社会のありようがどのように位置づけられてきたかという点にも着目する。

本論集では、『カラム』を軸に、1950～1960年代の社会変動のなかで、マレー・イスラム世界のイスラム教徒たちが自らの生活世界をどのように理解していたかを検討する。具体的には、イスラム教徒が自らのおかれた環境やその変化を主体的に位置づけ論じた場として、『カラム』のなかでも読者の投稿によって成り立っていたコラム「千一問」を取り上げる。また、『カラム』の時代のマレー語出版界の動向を検討し、その特徴を分析する。

これに加え、資料編として「千一問」の日本語試訳を掲載する。日本語試訳は、2018年度まで本共同研究の研究代表者を務めてきた坪井祐司が中心となって進めてきたもので、コラム「千一問」を特集した2014年以降、本共同研究が毎年発行している『カラム』論集に、発行年順に作成した日本語試訳を掲載している。本論集では、第108号(1959年7月号)～第142号(1962年5月号)および前回掲載できなかった第89号(1957年12月号)の「千一問」試訳を掲載する。

6) 本論集のもととなった共同研究の成果として発行された2010年以降の論文集『カラムの時代』十一編を参照。マレー・イスラム世界の「近代」[山本 2010]、公共領域の再編[坪井・山本 2011]、イスラム的社会制度の設計[坪井・山本 2012]、言論空間の形成[坪井・山本 2013]などをサブテーマとして分析を行ってきた。マレー・ムスリムの日常生活に焦点をあてたものに[坪井・山本 2014; 坪井・山本 2015; 坪井・山本 2016; 坪井・山本 2019]がある。インドネシアとマラヤの越境するネットワークに焦点をあてた分析については注4を参照。本論集のもととなった『カラム』プロジェクトの概要については、過去の『カラム』共同研究の論文集序論[山本 2010a; 坪井 2019]などを参照されたい。

3. コラム「千一問」から読み解くイスラム社会

『カラム』には読者の投稿によって構成された誌面が複数ある。ひとつは、ムスリム同胞団の団員名簿および各地のムスリム同胞団員の活動報告などである[山本 2003; 山本 2011]。もうひとつは、読者からの質問を募り、知識人が回答するという形式のコラム「千一問」である。「千一問」は、『カラム』創刊号で質問の募集を始めてから停刊まで掲載が続いた。連載記事のなかでも、創刊から停刊まで掲載が続いたのは「千一問」のほかにエドルスが筆名で書いた「苦いコーヒー」⁷⁾という論説欄だけであり、掲載期間の長さから、コラムが読者の支持を得ていたことが推察される。

「千一問」は、日常の宗教実践や社会生活のなかでイスラム教徒が直面した疑問や課題についての生の声を採録した誌面であり、1950～1960年代の社会の状況や、それに対するイスラム教徒の主体的な問題意識を明らかにする上で豊富な情報を含む。ただし、掲載期間が長く情報量が大きいこと、扱われるトピックが幅広い領域にわたっており概観しづらいこと、掲載期間中に問答の形式が変遷しておりデータの切り分けや整理に一貫性を持たせづらいことなど、全体像の把握には困難な点も多い⁸⁾。

「千一問」の内容を俯瞰するため、本共同研究ではこれまでに次のような基礎的な分類作業を行ってきた。まず、問答全体の意味による切り分け、質問単体の意味による切り分け、投書子ごとの切り分けなど、データの切り分けに複数の設定がありうることを確認し、データの整理統合を行った。その上で、質問単体の意味によって切り分けた質問群データを、近代的な知の枠組みを代表する米国議会図書館分類表をもちいて分類し、分類結果と分類作業の課題を示した[光成 2020]。また、投書子ごとに切り分けたデータのうち、女性名での投書についての分析を示した[山本 2020]。

本論集では、性格の異なる分類枠組みを用いて質問群データを分類した場合の比較検討や、回答群のうち、コーランへの言及のあるものを抽出した分析、

7) チュムティ・アルファルーク (Cemeti Al-Farouk) の筆名で、社会の出来事に苦言を寄せた。

8) 『カラム』第1号から第25号に掲載された「千一問」についての分析は[坪井・山本 2016]を参照。ほかハラルとハラムに焦点を絞って紹介する[金子 2015]がある。

また、テーマごとの問答の内容分析により、「千一問」の全体像の把握を進めている。同時に、『カラム』が発行された時代やそれを準備した時代のマレー語出版界の動向を掘り下げ、「千一問」分析に別の角度からも光をあてている。

本論集に採録する6本の内容と位置づけについて簡単に説明する。

光成は、イスラム教に基づく知の枠組みを用いて「千一問」質問群を分類し、近代的な知の枠組みによる分類結果との比較を行っている。イスラム教に基づく枠組みとしては、異なる地域で発行された二種のファトワ（イスラム法学者が示す法学見解）集の項目を採用し、項目群に反映される地域や時代の特性が分類にどのように影響するかも検討している。分類と注釈により、質問群全体の問題意識や指向性が把握された一方で、有効性の高い枠組みにおいても特定の項目の質問数が際立って多くなるなど、分類結果に偏りがでることも判明しており、ここに「千一問」質問群の特性が現れていることを確認した。

坪井は、「千一問」の回答に現れるコーランの引用に着目し、引用の頻度、章句ごとの引用回数などを整理した上で、どのような話題の問答で引用がなされるかを分析している。コーランの引用は、イスラム教固有の世界観や宗教実践についての話題だけでなく、一見すると宗教とは関係が薄い自然や科学の話題や、政治の話題においても行われていた。こうした文脈でのコーランの引用は、西洋近代的な知識や制度が優越する領域について、イスラム教による説明を通してこれを取り込もうとする試みであり、坪井はここに、西洋的な近代性が社会に浸透することへの葛藤を見出している。

金子は、「千一問」の問答における「異なるもの」への言及に着目した分析を行っている。他国のイスラム教徒、改宗したイスラム教徒、混成的な社会で隣人として暮らす宗教的他者、生活のなかの異文化的な要素など、質問群には層の異なる他者性が多々言及されている。これに対し、回答では、異なるものとの接触や交流自体を問題とせず、接触や交流の過程でイスラム法に抵触しないよう知識を深めることが重視されている。金子は、異文化理解とイスラム教の深い理解と実践が表裏一体にあるとの回答者の主張を読み取っている。

山本は、『カラム』創刊者のエドルスが1948年から1950年にかけて発表した小説群を取り上げ、エドル

スが当時のシンガポール社会をどう見ていたかを読み解いている。小説は、いずれも同時代の社会問題を下敷きにしたフィクションで、扱われるテーマは「千一問」でも馴染みのあるものである。小説におけるエドルスの社会認識と、「千一問」で示されるあるべき社会像とを合わせて読むことで、文学研究としての分析を深められる。また、山本は、小説群から抽出する意味の束を「千一問」のデータ分析に援用する可能性を指摘している。

西は、マレーシアの作家アブドゥッラー・フサイン（1920-2014）がペナンで過ごした1939年から1941年に焦点をあて、この時期のマレー語出版界の変化を論じている。ペンフレンド同盟の呼びかけに惹かれてペナンにやってきたアブドゥッラーは、インド系やインドネシア出身のマレー語知識人の知己を得て出版界で仕事を覚えた。しかし、外来の出自を持つマレー語知識人と「真正のマレー人」とを分かち動きが出版界を分断する。雑誌を通して覚醒した多数派の声が、「マレー人の大同団結」から排他的なマレー・ナショナリズムへと移行する過程を、インドネシアに出自を持ち、混成的なマレー語出版界のありように惹かれていたアブドゥッラーが居場所を失うまでの物語として叙述している。

篠崎は、華語文芸世界で育ちながらマレー語を学び、二言語で文芸活動を行った華人知識人のルー・ポーイエを取り上げている。ルーは、青少年期をインドネシアで過ごし、ジャカルタ滞在中に詩人ハイリル・アンワルと親交を深めた。この時の経験をもとにした小説では、ハイリル・アンワルと仲間たちがインドネシア語で文芸活動を行う者を出自に関わりなく受け入れる様を描いている。篠崎は、マレー語と華語の二言語で雑誌や辞書を作ったルーの文芸活動の背景にこのジャカルタでの経験を位置づけ、ルーがマレー語を核として多民族が参画する社会を構想していたと結んでいる。

4. カラムの時代にみるイスラム教徒の連帯と夢

本論集所収の論考は、カラムの時代の特性を明らかにする上でのいくつかの切り口を提示している。

第一に、量的データとしての「千一問」の分析手法である。[光成 2020]に続く「千一問」質問群の分類では、イスラム教を基盤とする知を援用した分類と、近代的な知の枠組みによる分類との比較検討を行って

いる。イスラム教を基盤とする分類でも、近代的な枠組みによる分類でも、特定の項目に質問が集中したため、質問の内容に基づいて作成した下位項目を挿入することで整理している(光成論文)。このことは、既存の知の枠組みを「千一問」の分類にそのまま適用しても適切に分類できないことを示す一方で、分類枠組みの手直しを行う出発点ととらえることもできる。質問が発された地域や時代、あるいは媒体の主張などの情報を、分類しきれなかった質問群に適した項目として補うことで、既存の知の枠組みを折衷する分類枠組みを作成できる可能性がある。

また、情報のセット、すなわち「意味の束」を介在させることによる量的データの分析手法の可能性が示されるなど、『カラム』および「千一問」の特性を明らかにすることを通して、地域の知を量的データとして分析する仕組みも検討されている(山本論文)。

第二に、「千一問」の内容に現れる混成的な現実である。「千一問」には、読者が知識人に問い合わせることで個別の問題の解決を模索する機能と、問答がなされる誌面を通じて、読者が互いの問題意識や回答に示された指針を共有する機能とを併せ持っている。このようなフォーラムとしての「千一問」において、科学技術から政治制度にいたる幅広い領域で強い影響力を持つ西洋的な近代性との向き合い方や、隣人として社会を構成する文化的ならびに宗教的に多様な他者との関係に関して、様々な問いかけがなされた。こうした問いかけに対して、イスラム教に基づく立場で解釈と指針を示そうとする回答者は、イスラム教徒として適切に振る舞うことと、多様な出自の情報や文化に接することの両方を重視する姿勢を貫いている。急速な社会変容や高い多様性のもとでこそイスラム教徒としてのあり方が鋭く問われるという、現代世界にも通じる社会の特性があぶり出されている(坪井論文、金子論文)。

第三に、マレー語出版界がたどった変化の過程に見え隠れする多様な社会構想の存在である。共通語としてのインドネシア語が切り開く文芸世界に触発され、マレー語文芸作品を発表した華人知識人(篠崎論文)や、「マレー人の大同団結」の呼び声に惹かれ、インド系やインドネシア出身のマレー語知識人たちとの交流を深めたマレー語知識人の遍歴(西論文)は、実現されずに主流にならなかった社会構想が彼らの移動の原動力となり、豊かな作品のモチーフとなったことを示している。

『カラム』の創刊者エドルスもまた、政治指導者や宗教指導者への厳しい批判を辞さず、そのこともあって文学界で過小に評価されてきた人物である。エドルスは、厳しい立場に立たされてもなお、『カラム』を通じ、望ましい社会のあり方を示す強い意志を持っていた(山本論文)。「千一問」と合わせて同時代の文芸作品を通してカラムの時代の証言を紐解くことで、『カラム』の問いと構想の位置がさらに明確になるだろう。

参考文献

(1) 雑誌

Qalam. Singapore/Selangor.

(2) 論文・文献

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

金子奈央 2015 「読者の日常生活におけるハラル」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代VI——近代マレー・ムスリムの日常生活2』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 32-36。

坪井祐司 2014 「カラムが切り取った世界：写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代V——近代マレー・ムスリムの日常生活』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 9-18。

坪井祐司 2019 「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界における自然と社会」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代X——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 3-7。

坪井祐司・山本博之編著 2011 『カラムの時代II——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2012 『カラムの時代III——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2013 『カラムの時代IV——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2014 『カラムの時代V——近代マレー・ムスリムの日常生活』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2015 『カラムの時代VI——

- 近代マレー・ムスリムの日常生活2』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編著 2016『カラムの時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編著 2017『カラムの時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク』京都大学東南アジア地域研究研究所。
- 坪井祐司・山本博之編著 2018『カラムの時代Ⅸ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク2』京都大学東南アジア地域研究研究所。
- 坪井祐司・山本博之編著 2019『カラムの時代Ⅹ——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所。
- 光成歩 2019『『カラム』が論じた女性の権利と自由：コラム『女の園』より』坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅹ——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 15-20。
- 光成歩 2020「近代的な知の分類と東南アジアのムスリム社会——「千一問」質問群にみるムスリムの社会生活と知的関心の広がり」光成歩・山本博之編著『カラムの時代Ⅺ——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 16-22。
- 山本博之 2002「資料紹介『カラム』』『上智アジア学』第20号、pp. 259-343。
- 山本博之 2003「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科)、第7号、pp. 59-73。
- 山本博之編 2010『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之 2010a「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」、1950～1969年」、山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 4-9。
- 山本博之 2010b「選挙と反乱——インドネシアの1955年総選挙の分析記事」、山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 26-32。
- 山本博之 2011「連載記事『ムスリム同胞よ、今こそ団結せよ！』」坪井祐司・山本博之編著 2011『カラムの時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 25-31。
- 山本博之 2016『雑誌からみる社会——情報とフィールド科学3』京都大学学術出版会。
- 山本博之 2020「投書欄に見る雑誌読者コミュニティへの参加の欲求——「千一問」の女性名の質問を中心に」光成歩・山本博之編著『カラムの時代Ⅺ——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 8-15。